

海外の照明家事情

濱野直子

現在、照明家の技術や機材の性能は、世界各国での格差はあまりないといえる。しかし、文化に対する国の取り組み方や、照明家の働きかた、地位などはたいへんなばらつきがある。それについて、(株)日本照明家協会関西支部主催の海外研修の企画をし、またコーディネーターとして参加した上での、海外の照明家事情を報告することとする。

日本の照明家

日本の照明家は大別すると、まず、建築に関わる照明家と演出に関わる照明家に別れる。建築に関わる照明家は、建物をライトアップしたり、インテリアに関わる照明設計をしたり、ショーウィンドウのライティングに関わっている。

演出に関わる照明家とは、何をするのかといえば、テレビ・舞台の演出に関わり、その作品の照明設計すべてに関わるのが、照明家の仕事である。(株)日本照明家協会には、演出に関わる約4000名が所属している。しかし、実際に照明の仕事に携わる人はその10倍はいるのではないかと思われる。その4000名が何をしているかというと、照明デザイナーとオペレーター、及び劇場やテレビスタジオの設備設計に関わるのが仕事である。

空間に絵を描く芸術家の要素と、電気に関わる知識と技術家の両面を有し、そのバランスの中でデザインする。その演出照明に関わる立場でこの報告を行うものである。

まず、照明デザイナーは演出家の意図を汲んで、美術家のデザインするセットにあわせて、照明の仕込み図を作成し、操作表を作成する。オペレーターは、その仕込

み図に従って、照明器具を配置し、結線し、必要な位置にフォーカス（位置を合せ、明るさ及び光の範囲を決める）する。また、操作表に基づき、操作（点灯の仕方を変え、色を変え、光量を決定する）する。常にチームで作業するので、協調性が重視される。どうすればその職種につけるかといえば、日本においては、照明オペレーターには希望すれば誰でもなれるが、デザイナーはやはり適性が有り全員がなれるとは限らない。設備設計に関わるのも適性が有り、少数しかいない。しかし、設計に関わるものも、デザインに関わるものも、オペレーターを経験した上で、その適正に合わせて、職種が変化するのである。また、デザイナーであっても、オペレーターとして照明機材の操作は当たり前に行うのである。

また、資格であるが照明技能認定の一級と二級がある。二級はオペレーターとしての資格を指し、一級はデザイナーや設計家としての資格と成る。男女の比率は9:1である。使用する機材は日本製が8割で、残りは、アメリカ製、イギリス製、ドイツ製、イタリア製、フランス製が混然としている。これが現在の日本の照明家の実情である。

アメリカの照明家

では、アメリカではどのようにその職種が別れているかといえば、まず、ユニオンに所属するのか、所属していないのかという二つに大別される。ユニオンとは、その職種の職能団体であるのと同時に、年金や健康保険などを共有する団体のことである。つまり、同じ会社に所属していても、所属するユニオンが違えば、職種事態が

違うし、年金の額や健康保険の負担率が違うのである。

照明家にとってのユニオンは3つある。一つは、デザイナー (designer) のユニオン。オペレーター (operator) のユニオン。最後にエレクトリッシャン (electrician) のユニオンである。エレクトリッシャンは照明機器の配置及び結線のみを行うのである。

このユニオンに所属する照明家は、オンブロードウェイの劇場や、3大ネットワークのテレビ局で主に仕事に従事している。また、ラスヴェガスのショーなども、ユニオン所属の照明家が制作している。そして、特筆することは、例えばテレビのソープオペラ (いわゆる昼のメロドラマ) では、デザイナーは一名、エレクトリッシャンは五名、オペレーターは三名というように関わる人数は全てユニオン主導で決まっています。予算がないので人数を変更するなどということは、許されないことになっている。番組の種別に従って細かく設定されている。これは、劇場に関わる照明家も同じで、その上演されるものの種類や、劇場の規模によって決められている。

このように、ユニオンに所属する照明家の身分は守られているといえる。給料もユニオンに所属していれば、一定の数字以上でなければならないということになっている。しかし、一度エレクトリッシャンのユニオンに所属すると、デザイナーやオペレーターの仕事に従事することは出来ない。いくら、適性があっても他の職種に異動することは出来ないのである。また、ユニオンには定員があって、欠員がなければ加入することは出来ない。加入する際には、それぞれの職種に基づき試験が実施され、その試験に合格しなければ加入出来ない。

例をあげればデザイナーの試験は、あなたの試験のテーマは「オペラの椿姫」である。これがセットの図面といって、資料を渡され、使えるオペレーターは○人、使えるエレクトリッシャンは○人。設計図制作に○時間、操作表制作に○時間といわれ、制限時間内にどれだけのデザインが創れるかが問われる。つまり、デザインする能力だけでなく、芸術にたいする造詣の深さや、プロデュースする能力も問われるのである。

ユニオンに所属していない照明家は自由に仕事をしていて、デザインもすれば、オペレートもするというよう

に、日本のシステムに似ている。オンブロードウェイに非ユニオンの照明家がないのかというと、少数ながら実はいたりして、まことに分かりにくいシステムであるといえる。劇場ごとにユニオンかそうでないかに、なっているのである。

ラスヴェガスでも、ホテルによってユニオンかそうでないかがある。あるケースでは、隣り合ったホテル二つに関わり電気設備の監修を行っている、ユニオン所属の照明家がいるが、片方はユニオンのスタッフしかいないが、もう片方はその一人を除いては非ユニオンのメンバーで運営されているといったケースもあった。

ハリウッドの映画のスタジオ群で制作されるテレビ番組では、撮影と照明を兼ねたフォトグラファー (Photographer) という職種もあった。男女の比率は7:3であった。

使用する照明機材はアメリカ製品がほとんどで、一部がイギリス製、日本製と、ドイツ製であった。

ドイツの照明家

最も印象的だったのは、ドイツの照明家に女性は何%位いるのかを聞いたら、ゼロと言いつけられたことである。これは、マイスターの制度と切っても切れない関係からである。ドイツで照明家になろうとしたら、電気工学の大学を出て、照明のマイスターの資格を持たないと仕事が出来ないのである。電気工学の大学は男子校が多く、女性の照明家が育ちにくい。また、専門の大学を卒業するだけでなく、先輩マイスターのいる劇場やスタジオで修行して、やっとその職につけるのである。優秀な学生は在学中に、何人ものマイスターからお誘いがかかるという。また、各照明家は、専門分野に分かれ、オペラならオペラだけ、演劇なら演劇だけというように、その他の分野の照明デザインはしないこととなっている。ここが、日本の照明家と大きく違うポイントである。日本の照明家は盆踊りからオペラ迄、あらゆる分野に関わるのである。

統一後の問題も多く見受けられた。旧東ドイツの照明家は、旧西ドイツの設備についていくのが大変そうであった。使用する機材は、アメリカ、イギリス、ドイツ、

オーストリア、フランス、イタリア、日本製と各機材の性能別に、どこ製と意識せずに、使い分けていたのが印象的である。



ベルリン ショウシュピールハウス

イギリスの照明家

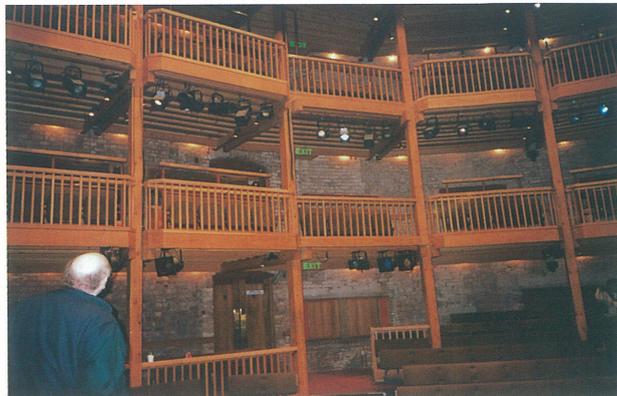
イギリスでは、舞台の照明家協会と、テレビの照明家協会があり、相互の交流はあまりないとのことであった。照明家は座付き（劇団所属）の立場が多く、ロイヤル・シェークスピア・カンパニーには、約 70 名の照明家が所属していた。伝統的な仕事に従事する照明家と、実験的な仕事をする照明家にわかれ、それぞれの劇場のコンセプトがはっきりしているのので、どこへ行けば、それぞれの作品に巡り合えるかが、分かりやすかった。

電気工学の大学出身者より、文学系の大学出身者が多いのも特徴である。照明家は芸術家としての側面のほうが重く、技術者としての側面は軽視されているようである。



ロンドン オリビエシアター

った。男女比は 8 : 2。使用機材はアメリカ製が 4 割、イギリス製 4 割残りが、ドイツ、日本、イタリア、フランス製であった。



ストラスフォード・アポン・エイボンのスワン座内

イタリアの照明家

芸術家として非常に尊敬されていたのが印象的である。ドイツの影響を受ける、北イタリアと独自のスタイルの南イタリアでは、これが同じ国？というほど、作品の作り方が違う。つまり、実験的な作品や、最先端の作品はミラノを中心とする、北イタリアで制作され、伝統的なオペラ作品等は、ローマを中心とする南イタリアで制作される。

また、代々照明家の仕事に従事するケースが多く、親子孫三代で現場で作業していることもあった。

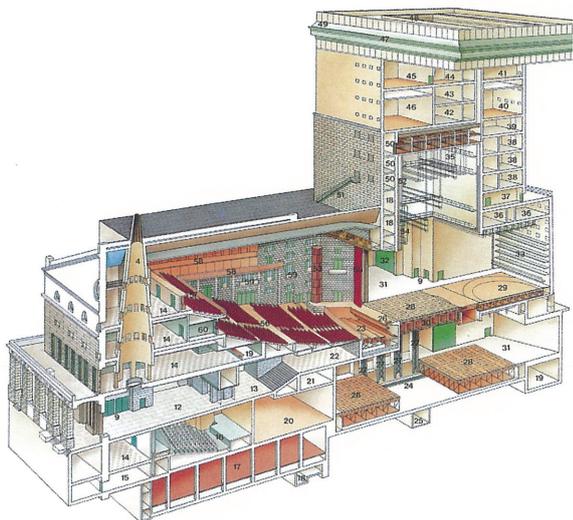
小劇場どうしがネットワークを組み、各本拠地を巡演しあうことが有るのも一つの特徴で、色々な情報をもつ



ローマ オペラ座

ているのは、小劇場に関わる照明家であった。男女比は8:2。

使用機材はイギリス製が5割、イタリア製が3割、残りがアメリカ、ドイツ、日本、フランス、オーストリア製であった。



ジェノバ 国立オペラハウスの断面図

オーストリアの照明家

ドイツの影響を深く受け、マイスターが中心であるが、厳密な制度ではなく、女性照明家も存在している。オペラなど音楽に関わる劇場が大変多い。また、照明家も公務員が多い。テレビは、自国で制作されているものは深夜に放送されるものが多く、日中に放送されているものは、近隣諸国の作品が多かった。また各種投影機については、オーストリアが熱心に開発していた。使用機器はドイツ製が多く、チェコ製イギリス製も見受けられた。

チェコの照明家

旧ソ連の影響下から抜け出ようとしているのが、ありありと解るのがチェコの照明家である。アメリカ、イギリス、日本などの機材にあこがれ、数少ない輸入機材を自慢するところがとても微笑ましくなった。しかし、経済状況が悪く、離職する照明家が多く（電気設備業や販売業に転職）、ひとりひとりの職責が重いのが印象的である。美術家の伝統的な賞があるのもこの国であるが、現

在は大変な状況である。

その中で特筆すべきことは、チェコ製の機材スポボダであった。柔らかい光源で、広範囲に照射される。省エネルギーのもの。ヨーロッパ各国で使用されている。設計したのはスポボダ氏。チェコの照明家といえばこの方の名前が出てきた。残念ながら、今年4月にお亡くなりになった。しかし、その情報が我々のところまで駆け巡る程のチェコの舞台芸術に尽力された。女性照明家は残念ながら、見つからなかった。

スペインの照明家

芸術家として尊敬されているのはイタリアと同じだが、とてもよく働くという、イメージを持たれているのが、スペインの照明家である。確かに、シェスタもとらず、よく働いていたが、我々にはシェスタの習慣がないので、同じだなあというのが、感想である。

また、イタリアの小劇場のネットワークに加入している小劇場も有り、人的交流が盛んに行われている。照明家協会にあたるものが、バルセロナ照明家協会というのがあった。マドリードは、伝統的な上演物が多く、国立劇場に所属する照明家は約50名。

舞台とテレビの分野にあまり別れておらず、両方に関わる照明家が多い。劇場から中継されることも多いので、劇場にはロビーや客席等撮影も出来るような設備も整えられていた。また、映画館と劇場を兼ねている劇場も多く、映写技術も修得している照明家もいた。



スペインにあった小劇場のネットワークのポスター

最後に

主に現場で出会う事の有る国々の人と接したり、訪問したりしていると、異文化に触れている気がなくなってしまふ。また、仕事上においては格差もない。専門用語はほとんど英語なので、現場での仕事のコミュニケーションには不自由しない。

しかし、我々が忘れかけていて大切な要素に気付かされることがある。それは『省エネ』。アメリカでは1KWの機材を、同じ明るさの750Wの機材にどんどん変えている。その買い換えは、「省エネ報奨金」という形で国から支給される。逆に買い替えなければ、「省エネ罰則金」が課せられる。新しい機材にただで変えられるので、ブロードウェイの劇場街はわずか3年で全て機材が変わっていた。ただ、ウロウロと出かけているが、こういった現地に行かないと得られない情報もあるので。